

# 福井大学教職大学院における若手研究者教員の力量形成過程

コミュニティ内「言語」の実践的理解を軸に

山口 真希

はじめに

本論は、学校拠点方式を採用する教職大学院にて、現場の問題解決に寄与する若手研究者としての力量形成過程について自身の1年目を振り返った報告である。筆者は2012年度より本学教職大学院に特命助教として勤務し、拠点校・連携校との協働研究ならびに大学における教育実践に従事してきた。そこでの営みは、現場の課題に協働研究者としてどうアプローチするか、教員養成に携わる大学教員としてどのような資質を養うかという自身の力量形成過程であると実感している。福井大学教職大学院の学校拠点方式の取り組みは、現在、全国的に注目されており、教員養成に携わる大学及び研究者には、協働研究者としての役割が今後ますます求められると考えられる。そうした状況のなか、若手研究者教員の力量形成過程を明らかにすることは、今後の教員養成を担う若手研究者の育成と拠点校方式による協働実践研究の推進に寄与するものであると考える。

教育学を専門にしてこなかった新米の若手教員が教職大学院で働きはじめた1年目に何を感じどう学んできたのか、自身の学習（発達）を実践コミュニティへの参入過程として描いてみたい。筆者は学部時代に特別支援教育について学んだ後、大学院にて心理学を専攻し、おもに子どもの数概念発達とその障害について研究をしている。本学に赴任して一番の壁はコミュニティで話される「言語」であった。もちろんここで話されているのは日本語であり、字義的に意味を汲み取ることは可能であるが、新参者にとってはコミュニティのなかにおける独特の言い回しや意味のニュアンスがわからないことで話題の文脈を追えない事態に陥っていた。まるで外国語のようであったという意味で、本学教職大学院で意思疎通をはかる手段の一つを、比喩的に「言語」とよびたい。言語がわからないことは、本学教職大学院のコンセプトを理解することや自らの実践に対する妨げとなっていた。よって本論では、教職大学院コミュニティ特有の言語を習得することを切り口として、新米が実践を重ねていく過程を振り返ってみたい。

## Ⅰ期 コミュニティの言語が全く分からない(4月)

人は自分たちのコミュニティのやり方を当たり前だと思いがちである。自分たちのコミュニティの捉え方が唯一適切で良識のあるものだという「自民中心主義」的思考に陥っていることがしばしばある。慣れ親しんだ自分自身のコミュニティとは異なるコミュニティに身を浸したとき、多くの場合カルチャーショックを経験し、「自民族中心主義」的思考が自分のなかに湧き上がってくる。これまでの流儀とは異なるやり方で物事が行われるという新たな環境におかれたとき、新奇の流儀を軽んずることによって自分自身の文化的アイデンティティを強化する働きが

生じがちである。

まさにそれと同じようなことが、4月に入って自身の身に生じたのである。筆者はつい3月まで大学院の博士課程3回生であり、発達心理学という学問をベースに研究を進めてきていた。それが4月に入って一変した。院生だった身が教員という役割を与えられ、学校現場へ赴くと丁重に迎えらる。そのギャップ、身の置き所のなさ、居心地の悪さを感じるとともに「自分は一体何者なのか」アイデンティティが大きく揺らぎはじめた。また学際的な職場で誰ひとり自分と同じ発達心理学を専門として領域の近い研究をしているメンバーは見当たらない。もちろん研究者ばかりではなく、実務家教員も多いことから、それぞれの専門性は多種多様であった。一気に広くなった地図のなかですっかり迷子になってしまい、自分がどのあたりを追究している身であるか自己紹介ではうまく説明できない日々が続いた。また特別支援教育にかかわる業務に携わる者として採用されたにもかかわらず、「特別支援教育(担当)でしょ」と声をかけられることに戸惑いを覚えた。学部時代に特別支援教育について学んだが、自分のなかで不快感が残った経験がある。自分が欲しい答えが一向に見つかる気配がなかった。障害のある子どもがどうしてこの社会で生きにくいのか、子どもの内側の世界を知りたかった自分は「特別支援教育」という枠組みを一旦とりはらって、生身の子どもの発達を捉えようと研究のアプローチを変えた。そのなかで障害のある子どもが何もう「特別」ではないこと、「特別な教育」という見方を超えていく必要があることに確信を持つようになった。そういう自分自身のこだわりがあったからこそ、「特別支援教育でしょ」という他者のコトバに、「特別視されたくない」なんていう被害妄想さえ抱いていたのである。大学院時代とは違うコトバ、しかも自分が一旦棄てたと思っていたコトバで自分を定義されたように感じてしまっていた。

自分はいつの間にか、心理学とりわけ大学院のなかで使っていた発達心理学領域周辺のコトバばかり聞きなれて、いつの間にかそれしか受け付けなくなっていたようである。以下の記録は、赴任してまもなく大学院での指導教員宛に近況を報告したときのメールの一部であるが、新しい「言語」への抵抗感が現れている。

2012年4月11日(大学院の恩師へ宛てたメール)

...こちらに来て、奈良女(母校)のいいところもありよくないところもいろいろ思い返されます。ですが、私は(大学院の)5年間で知らず知らずのうちにいろいろインプットしていたものがあることに気づきます。それは、こちらで同僚の先生方とお話するときに、思わず発したセリフのなかに、聴きなれた懐かしいことば(表現)を見つけることができるからです。いま、まだこちらの文化に染まっていませんし、母語(大学院で培った)でしか喋れない自分がとても際立って見えるようにさえ感じます。まだ第二言語が習得できていないからこそ、会議でも眠りそうになるくらい「分からない」を堪能できるんだなぁとったりもしています。...以上、近況報告でした。

赴任した先のコミュニティでは「省察」に代表されるような自分が使い慣れないコトバが流布していた。「もっかん(木曜カンファレンス)」「ゴードーかんふぁ(合同の月間カンファレンス)」「らうんど(ラウンドテーブル)」といった略語の意味も経験するまではイメージすらできなかった。正式名称で語られるならまだしも、こうして略されてしまうと、ますますついていけない疎外感を抱いてしまった。周囲の話すコトバがまるで外国語のようで、それを聞き取ることはできても意味を理解することは難しかったし、ましてやその言語で自分がものを喋ることは不可能であった。そんなとき、唯一ほっとした瞬間というのは、自分が何気なく発した中に聞き取れる馴染みのコトバたちであった。そして同時に自分とコミュニティの間に境界線が生じ、自分自身の異質性を強く感じたのであった。

もちろんすべてが聞きなれないコトバばかりではなかった。「ナラティブ」「アクションリサーチ」「メタ認知」等、自分の領域に近いものも頻出していた。ただ、その使用法に違和感を覚えた。FD研究会にて修了生の長期実

実践研究報告書を検討した際には、自分の理解と違った使われ方をしていることに強い戸惑いを覚え、専門用語の扱いについて厳重だった自分の研究室と比べて、ここでは随分フリーな印象さえ受けた。

慣れ親しんだ「自分達の言語」を棄てていくような危機感を抱いて、筆者のとった行動は大学院時代に読んだ書物を再読することであった。それはぐらつく自分の足元を固めようとして、自分のいた場所を確認する作業、まるで母国語を再習得するかのような取り組みであった。それと同時に、1年先に勤務している年齢の近い同僚に疑問をぶつける日々が始まった。同僚には書物を読んで確かめた自分のものの見方を話しながら、このコミュニティの目指していること、スタンスについて教えてもらうようになった。ただ、教えてもらったからといって、それをそのまま理解できるわけではない。幸い、同僚とは相部屋でもあったので、毎日のように小さな議論をする日々が続いた。その過程では、自分が大事にしたいこと／してきたことの輪郭が明確になるような感覚を覚えた。今思えば、新しい文脈に先に住む他者との間で自らの思考の根拠を言語化する作業によって、院生時代の学びが「脱文脈化」し、そして「再文脈化」しはじめていたのかもしれない。本を読んで分かったつもりになっていたことが、自分の思考を説明する際にようやく「使える物」になり、本物の知識（学び）へと定着しはじめたようであった。

一方、新参者が言語を理解しているかしていないかにかかわらず、仕事をしている以上すぐに実践に放り込まれるかたちになった。考えてから動くのではなく、動きながら考える、そういうことが要求されている職場であることは、下記のメールからも既に実感していたことが分かる。

2012年4月17日（大学院の恩師へ宛てたメール）

...こちらでは心の準備なくその場であいさつや意見を求められたり、授業の手伝いをしたりと、臨機応変に動くことを要求されることが多いです。そんなことが苦手な私ですが、考える間を与えられないのもかえっていい訓練になっているような気がします。...そんな今日この頃です。

初期の頃は、ここでの振る舞いに関する型を持ち合わせておらず、当面はコミュニティに溶け込むこと、コミュニティにおける実践を理解することに努めていたようである（下記、参照）。

2012年4月23日（大学院の恩師へ宛てたメール）

...ここでやっていることに、ときどき違和感や葛藤を抱えながらもだんだん染まっていく自分に気づきます。大きな集団に属していると、自分の足元が見えなくなって少しこわいです。学校訪問、授業参観、研究会参加へのしかたも一緒に行く人のパワーに押されず自分なりにできるといいなぁと思います。またお話をさせてください。

筆者は、それまでに某幼稚園における「気になる子ども」の巡回相談に従事し、子どもの育ちや教育について協働的に探求する園内コミュニティの形成を支援してきた経験がある。そのなかで、現場に入り込むことのできる協働探求者と現場の教員とが互恵的な学び合いを織り成す過程を体感するようになっていた。そこでの形成過程における自身の動き方が、現場へ参入するときの基本形として刷り込まれていたあまりに、それとは質的に異なる参入のスタンスに触れ始めた4月は強い動揺を覚えたのであった。

## II 期 コミュニティの言語を聞いて意味が推測できるようになる（5月～）

一ヶ月を過ぎた頃、週間カンファレンス、月間カンファレンスという小さなサイクルを一度経験したのもあり、用語の基本的な使用については抵抗感が薄れてきていた。しかしながら依然として、会議等で議題にあがる内容理

解についていけない日々が続いていた。4月に引き続き、会議に飛び交うコトバをメモしてはあとで確認する作業（訊く、調べる）を行った。そんななかでニュースレター43号編集の副担当として、機関紙づくりのしくみについてペアとなった先輩教員から教えてもらう機会があった。ここでは新しいスタッフへの文化実践の伝達については、文脈と切り離して行うのではなく、共に動きながら実際の文脈のなかで伝達するしくみになっていた。始めはサブ的な役割を与えられ、傍らで覚えたことを次の機会に自分がメインの役割として担っていく。そういう学習を支援する段階が組まれていた。筆者は編集後記の執筆をさせてもらうことになり、以下のように4月の合同カンファレンス（月間カンファレンス）を振り返ったコメントを書いた。

2012年5月10日（ニュースレター編集後記）

五月の空が気持ちよく晴れわたる季節となりました。今年度からスタッフとなった私も、1か月を過ぎて少しだけ、心のモヤモヤの隙間から青空が垣間見られるようになりました。初めて参加した4月の合同カンファレンス。いろんな生活史を持つ人たちが互いに聴き語り合う場に立ちあい、いつの間にか時間を忘れ重なる声のなかに浸っている自分がいました。このおもしろさをいつまでも追求していきたいと思いました。これからがとても楽しみです。

5月の最初に、はじめての月間カンファレンスで受けた漠然とした感覚的な感想を、不特定多数の読者を想定しながら書き言葉にする経験によって、自身の意識がクリアになる感覚を味わった。ただ、このときはまだ「経験をふりかえって書き言葉にすること」の重要性については無意識的な気づきであったし、教職大学院がこれをいかに大事にしているかということにも不理解であった。これについて意識的に言語化できるようになるのは半年以上過ぎてからのことであった。

5月以降、学校訪問の回数が次第に増えていった。筆者は特別支援教育を主に担当する先輩の教員について動くことが多かった。現場に向かう車内では、これからどういう気持ちで向かえばいいのか、自分はどういう役割として参加することになるのか、自身の抱える疑問や不安について丁寧に応えてもらえた。現場についてからはどういうスタンスでどういう発言をするのか、少し先を歩く同僚の言動をつぶさに観察する自分がいた。そうして毎回同行してもらえろールモデルの存在から、自身の動き方が少しずつ見えてきた。

400人以上の参加者が一斉に集う6月のラウンドテーブル（年間カンファレンス）は、大規模なイベントの割に少人数のスタッフで運営が行われていた。そのせいか筆者も名簿管理という大事な役割を任せてもらえることになり張り切っていた。名簿管理の前任である先輩教員から、過去に使用していた名簿管理ファイルとその操作スキルを受け継ぐことになった。ファイルは独自のやり方をプラスしてよりいいものに更新していいこと、この時点で完全に移譲するのではなく自分もカバーするので一人きりで抱えないこと、この2つを留意点として付け加えられた。今思うと、文化は個人に一方的に影響を及ぼすような静的な実態ではないことや協働が単なる役割分担ではないことを暗に教わっていたのかもしれない。ただ、常に誰かとペアやチームで動くことの多かった最初の2ヶ月は、自分の存在意義が見出しにくく、コミュニティの隅っこにいるような感覚が強かった。だからこそ連日連夜にわたるラウンドテーブルの準備期間は、自分に主として与えられた名簿管理、そのなかで自分なりの工夫を見つけられたことにより、ようやく自分がコミュニティの一員になれた気がしたのであった。

7月に入り、3度目の月間カンファレンス、当日の司会を任されることになった。その日の流れはレジュメの進行表に書かれているとおりであるが、マイクを持ってどんな風に進めていけばいいのかを考えたときに、中身について熟知していない自分に気づく。当日のテーマを自分自身のコトバで言い換えることが難しく、ただそのまま読み上げるようなかたちになってしまったのを覚えている。ただ、その後にはじまる夏の集中講座においてもグループセッションのファシリテーターをする回数を重ね、次第に自分らしくテーブルにいられるようになっていった。

この頃より、教職大学院のコンセプトやカンファレンスごとの趣旨、デザインの意図をちゃんと知りたいと思うようになった。そうした意欲も重なり、また用語の意味が推測できるようになったのもあって、機関研究誌「教師教育研究」や機関紙ニュースレターのバックナンバーの記事など活字になったものを読むことが可能になった。「第二言語」を早く習得したいと思っていた。

コンセプトを理解したいと願う背景には、教職大学院における日々の実践に疑問を感じるところがあったからでもある。7月に入ってから、少し見えてきつつあるものも増えたと同時に、これまでの自分自身の価値観との相違を大きく感じる経験も相まって、主に協働研究者として現場へ参入のしかたやカンファレンス等のカリキュラムデザインの中身について違和感を覚えるようになっていた。それは4月のときの「わからない」状態での反感とはまた少し違っていたことが以下メール内容からうかがえる。

2012年7月17日（大学院の恩師へ宛てたメール）

福井の業務（現場に赴くこと）が少しずつ増えてきましたが、それと同時に教育実践にまつわるいろいろな疑問が一気に湧き起ってきています。…解決できそうにない課題を抱えて気持ち悪く、答えのヒントを見つけようとして、院生時代に読んだ本をまたなぞるように読んだりしていますが、それがどれも初めて読むような感覚がして不思議です。失敗で落ち込むことも憤りを感じることもたくさんありますが、何とか7月中旬まで来ました。

共感できないまま取り組んでいる実践を重ねるたびに、それについて受身的な自身への憤りも感じていたようであった。ただそれをうまく言語化できないもどかしさを感じ、自身の価値観をどうにか目に見えるかたちにしたいと、過去に読んだ書物のページを再びめくっていた。ところが当時と明らかに関心が変わっている自分がそこにあり、目にとまるページ、線を引く文章、それらが以前の箇所とはまるで違い、自分の読み方が変わっていた。それは裏を返せば、4月以降の視点の広がりと問題意識の変化の現れでもあった。

### Ⅲ期 コミュニティの言語を使ってみることができるようになる（10月～）

後期が始まり、全体の会議で自分の所属している小さな会議の報告を担当するようになった。1時間で話し合われたことのうち、どこまで詳しく報告すればよいのか、その内容を吟味するのに神経をつかった。また説明をするためには理解している必要があり、全体に伝わるように必然的にコミュニティの言語を使うことになった。恐る恐るではあるが、自分が使える用語を広げていく過程が始まった。

次第に日々の業務に馴染んでくことで初期の違和感（個人情報扱い、カンファレンスにおける推薦図書類の偏り）が麻痺してくる感覚を覚えるようになった。趣旨に触れるようになったことで、理屈として理解はできるが、感覚として腑に落ちているわけではなかった。自分がそのことを問い続ける意味があると思いながらも黙って過ごすようになっていた。

FD研究会では、自身の研究を語り合うサイクルになり、研究として自分自身がここでやれることはどういうことかという模索が始まった。それは教職大学院の文化に慣れることに一生懸命になっていたあまり埋没しそうになっていた自分らしさを取り戻すきっかけでもあった。教育学を専門としてこなかった自分が協働探求者としてどのようなかたちで参入できる可能性があるのか、またインターンをしている院生の学びを自分という個性をもってどう支えられそうなのかを真剣に考え始めていた。教職大学院という組織のなかで自分の役割、振る舞いについて改めて考えることは、アイデンティティの再構築といえるのかもしれない。

そういう流れのなかで、自分自身が大切にしてきた学びかた、教育実践の場を観察し記録化していくこととの意

味を再確認していたことが以下の記述から読み取れる。

2012 年 10 月 23 日 (大学院の恩師へ宛てたメール)

幼稚園訪問+記録の作成は大きな学びであると福井に来てから切に感じます。

福井の院生 (インターン生) も記録を書き、振り返ることをつかんでいくサイクルを日々繰り返していますが、いろいろな子どもたちに出会うことは、人間を理解する土台のようにも思います。

本学のストレート院生もまた、自身の実践を記録に残しながらインターンを行っている。自身のしてきたこととの基本的な共通項を手がかりに、本学におけるカリキュラムデザインの意図を探っていこうと試みていた。

この頃になると、リーダー院生の顔と名前も一致するようになっており、月間カンファレンスでは顔なじみのメンバーで語り合う機会が増えた。それはつまり、基本的な情報を一通りおさえることができつつある状況であった。ここでの実践に対して、自分のなかで思考、振る舞いの枠組みのようなものが見え始めていた。10 月の月間カンファレンスにおける感想を下記のように残している。

2012 年 11 月 12 日 (ニュースレター編集後記)

冷雨が降り続く季節を初体感しながら、噂で聞いた「福井の冬」の到来を今かいまかと心待ちにしている今日この頃です。後期最初の 10 月合同カンファレンスでは、ずいぶんとお互いに顔や名前を覚えた仲間がテーブルを囲んでいました。親近感を抱きながら、またこれまでの学びを共有していることもあってか、前期とは違った空気が醸し出され、議論の質もまた少し違っていったように思います。次のカンファレンスでは、他校研究集会への参加等から新たな視点を得た仲間が集います。どんな機会になるのかとても楽しみです。

次の月間カンファレンスのテーマについて触れているように、少し先の見通しを持ってものごとを考えるような以前にはなかった余裕が生まれ始めていた。

#### Ⅳ期 コミュニティの文化を自分のコトバで説明してみる (1 月～)

教職大学院では、ほとんどのスタッフが 1 年を通して学部「教育実践研究 A」という教職科目の授業を手伝っている。全学年を対象とした縦割り集団がいくつかの教室に分かれ、教員が複数名で各教室を担当するかたちになっている。筆者の役割は、毎回その場で提出される学生のレポートを読み、それについてコメントすることで学生の探究をサポートすることであった。筆者はこの授業が何を意図して組まれているのなかなか理解できなかった。なぜ毎回チームで語り合い、レポートを改訂し、最終レポートを仕上げていくのか。その取り組みの漠然とした方向性は分かっても、実際に学生個人レベルではどのような学習が成立したと言えるのか、ずっと気になり続けていた。そんななかで迎えた 2013 年 1 月 11 日の授業では、いつものようにレポートを読みながら何とか先述の疑問に答えが見つからないかと考え込んでいた。ふと自分の関心領域にある「思考と言語」の関係が頭をよぎった。これらの概念を援用して、学生の活動にそれぞれどういう意味があるのか整理してみたくなった。授業時間中、レポートを読みながら考えをまとめ、それをその日のコメントとして最後に述べた。経験をまず音声言語にしてみることで、それを文字化してみることで、記録化したものの価値、更新していくことの意味...言語化する作業と思考の深まりについて自分自身が現時点で考えていることを半分自分のために話してみた。学生のなかにどれほど響いたかは分からないが、自分としては本学の教職科目のコンセプトが自分なりに理解できたようなすっきりした気持ちにな

った。また教室で話をきいていた主担の教員からは「そんな風に自分らしさを出したほうがいいよ」と自身のコメントに対する感想をもらった。

その後というものは、修了予定院生の（修士論文に相当する）長期実践研究報告書について自分のコトバで提案してみたり、特別支援教育センターの専門研修において自身にひきつけてコメントをしてみたりする日々が続いた。一方、ちょうど学外の知人に通じるコトバで自身がいま取り組んでいる教職大学院の業務について説明しなければならない機会も何度か重なった。そうして学んだコトバの意味を別のコトバによって定義したり、他のコトバとの体系的な関係を説明しようとするのは、言語によって自由に思考をコントロールできるようになることへとつながっていくのだろう。コミュニティ内外のことをそうして語れるようになることが学習の断片的な指標でもあるように思う。

目の前に生起する現象を自分のコトバで表現していくことの重要性を強く実感していたこの時期は、公開授業を参観したときもそういう視点で子どもたちを見つめていたことが、以下の記述に現れている。

2013年2月12日（ニュースレター編集後記）

先日訪問した伊那小学校では、授業中の子どもたちの発言にそれまでの学びの履歴が感じられ、とても驚きました。何気なく切り取ったことばに厚みがあるのは、子どもたち一人ひとりが自分自身のまなざしで現象をとらえ、自分のことばで語ってきた経過があるからだと思えました。

今年度も長期実践報告会の季節となりました。それぞれの先生方の長い実践の営みを皆で共有できるのをとても楽しみにしています。

伊那小学校の公開研究会に参加し、子どもたちの学びかたに圧倒されたことを覚えている。子どもたちは教室の談話空間のなかに自分たち自身で言語を創りあげ、その用い方にそれぞれの独自性を表現していた。本学教職大学院における「言語」もまた、完全に出来上がったものではなく、対話に参加するメンバーが互いに自分のコトバを重ねながら創りあげているのではないかと思うようになった。この時期になると「第二言語」を習得したい焦りが消えて、むしろ既に持っているコトバで語ることの必要性を感じるようになっていた。

2013年2月21日（大学院の恩師へ宛てたメール）

福井は今、ラウンドテーブルという大きなイベントを控えてバタバタですが

私はどちらかというと、自分の研究のほうに（ようやく）気持ちが向くようになっていきます。

来た当初は慣れること、早く覚えることに一生懸命でしたが、少しずつ自分のことばで福井の実践を語りたいと思うようになっていく今日この頃です。

メンバーがコミュニティで共有される「言語」の創造に関与していくことは、コミュニティの文化が変容していくことにつながっている。本学教職大学院もまた、そのときどきに参入するメンバーによって少しずつかたちを変えている存在なのだということにようやく気づいたのであった。

おわりに

社会人1年目の若手教員が、異質性の高いコミュニティに参入して働くようになったとき、役割の変化、共有している思想の違いに動揺を経験した。これまで無意識であった自分らしさというものについて考え始め、アイデン

ティティの維持に執着する。しかし間もなくコミュニティのダイナミックな動きに巻き込まれ、ある種、同化することを余儀なくされる。新参者は動かされながら考え続け、少し動けるようになると抵抗感を顕にした。それは文化が完成形であること、自分が一方的に影響されると思い込んでいたからかもしれない。コミュニティで話される「言語」獲得に気持ちが焦り、流暢に話せるようになることがメンバーの一員になることだと考えていた。本学教職大学院が一つとして大きなコミュニティではあるが、そのなかの個人は実は複数のコミュニティにまたがって属していることに気づくのは1年を経ってのことであった。個人が互いの専門性を尊重し、むしろ異質性が高い集団だからこそ文化の発展・創造につながっているのを今ようやく実感している。

ロゴフは文化的歴史的に構造化された日常生活のなかで他者や環境との多様な相互作用を通して子どもが発達していく過程を指して導かれた参加(guided participation)という概念を提唱している。本学教職大学院もまた、明確な教育的意図を持たないで新参者を文化の担い手としていくしくみが細かく編まれている。個人がコミュニティのなかでどこに布置されるか、そのなかでどのような文化実践を担うか、アイデンティティの変容は個人が文化とどう相互作用するのかということなのだろう。コミュニティ内の対話において、他者のコトバに自分のコトバをどう重ねていけるか「言語」の創造にどう関与できるかということが、自身の実践力を高めることにつながるのではないだろうか。

#### 参考文献

- Lave, J., & E. Wenger.(1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖[訳] 1993 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』 東京：産業図書)
- Rogoff, B. 2003 *The Cultural Nature of Human Development*. Oxford University Press. 當眞千賀子(訳) 2006 文化的営みとしての発達 個人, 世代, コミュニティ. 東京：新曜社.
- 佐伯胖.(1990). アクティブ・マインド. 佐伯胖・佐々木正人(編) アクティブ・マインド 人は動きのなかで考える. 東京大学出版会.
- Wertsch, J. V. 1991. *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳代子[訳]2004. 『心の声：媒介された行為への社会文化的アプローチ』 東京：福村出版.)